

俳句・随筆

柳 星甫

防府市
(1886～1960)



【著作】

『星甫随筆』（昭和33・柳きよ女・星甫随筆刊行会）
『森鷗外の父 森静男のこと』（昭和22・防長医界社）
『重源上人七百五十年祭献詠集』（編集 昭和28・俊乗坊重源顕彰会）

柳星甫は、山口県の俳句興隆及び文化振興に多大の功績を残した。

明治十九年（一八八六）五月二十七日、佐波郡西ノ浦（現・防府市西浦）の旧家に生まれる。本名・義雄。父雅利は、明治三十一年（一八九八）三月八日から明治三十三年（一九〇〇）三月六日まで、西浦村長を務めた。

県立山口中学（現・山口高校）を経て岡山医学専門学校（現・岡山大学医学部）卒業。下関で開業していた叔父の医院の内科小児科勤務医となる。その後、九州帝国大学医学部の耳鼻咽喉科に入局して研修。大正二年（一九一三）十月、防府の車塚で耳鼻咽喉科医院を開業した。

青年時代より『ホトトギス』に投稿していた星甫は、開業後の大正五年（一九一六）五月、自ら俳句結社「芳風吟社」を創設し、俳誌『はまにかな』を発行した（大正七年（一九一八）六月終刊）。大正十三年（一九二四）三月からは俳誌『めばえ』を刊行、戦時下の昭和十九年（一九四四）五月まで続け、ホトトギス派の俳誌として高いレベルを保持しながら、多くの俳人育成に努めた。また山口県俳壇の重鎮・指導者として、全国的な俳句振興活動を意欲的に展開した。

戦後の昭和二十二年（一九四七）一月、山口県医学界の総合機関紙『防長醫界』を創刊。昭和三十二年（一九五七）八月刊行の第百二十七号まで、十年間にわたって編集発行人を務めた。また、森鷗外の父森静男の生誕地碑、ハンセン病患者救済の父光田健輔の胸像、俳人種田山頭火の句碑建設等にも力を尽くし、郷土史家・随筆家としても活躍した。死の一年程前、病床にあって昭和三十三年（一九五八）十二月二十日、友人等により『星甫随筆』が刊行された。

昭和三十五年（一九六〇）一月十四日、永眠。享年七十三歳。

（文・森川信夫）



己が服む おのが処方や 暑氣中 星甫
右の句碑は、防府天満宮参集殿裏手の梅林の中にある。建設にあたっては、親交の深かった防府の作家又田竹栖らが发起人となった。昭和五十三年四月二日、除幕式が行われた。



『星甫随筆』（左）と俳誌『めばえ』（右）

柳 星甫 年譜

（提供・森川信夫）

明治19（一八八六年）

科学の内でも最も発達している医学と、文芸の真髓といわる俳句との距離は余程遠いようであるが、昔から医者坊主といって医者は僧侶と同待遇を受けていたものであり、俳味禅味と称して俳句は禅学と親密な関係を有していて、同臭相合した故か不思議と深い関係をもっている。（中略）

私も医籍の末尾に登録せられ俳句に興味をもち、下手ながら句作している一人である。殊に私は耳鼻咽喉科を専門として開業しているため、仕事の関係上四六時中座敷牢の有様で、昼間は無論外出できず、親族間の無音務めさえ出来ないような次第で夜間私用のために外出しても電話のない処へはめったに行くことが出来ない、丸で足に鎖をつけられた生活を続けているのである。それで私の俳句には所謂机上句が多い。私が机上で作った句と、たまに夕方散歩でもして得た句とを混ぜて投句すると、よいと思っていた机上句よりも左程に思わなかった実感句がいつも選に入っておる。こんな時や、芭蕉や一茶の句乃至は石川啄木の歌の体験から出たものを読んでしみじみ感じさせられる時、自分は俳句を作る資格がないといつても悲観するのである。

（『めばえ』（大正14年7月）所収「私と俳句」より抜粋）

昭和28（一九五三年）	六七歳
昭和29（一九五四年）	六八歳
昭和32（一九五七年）	七一歳
昭和33（一九五八年）	七二歳
昭和35（一九六〇年）	七三歳
《没後》	
昭和53（一九七八年）	

5月27日、山口県佐波郡西ノ浦（現・防府市西浦）の旧家に長男として生まれる。本名・義雄。父・雅利は、明治31年3月8日、33年3月6日、西浦村長を務めた。県立山口中学（現・山口高校）を経て岡山医学専門学校（現・岡山大学医学部）卒業。下関で開業していた叔父の医院の内科小児科勤務医となる。その後、九州帝国大学医学部の耳鼻咽喉科に入局して研修。

10月、防府町の三田尻車塚（現・防府市車塚町）で耳鼻咽喉科医院を開業。

5月、俳句結社「芳風吟社」を創設。俳句雑誌『はまにかな』発行。

6月、俳句雑誌『はまにかな』終刊。

3月15日、俳句雑誌『めばえ』を創刊。

5月5日、俳句雑誌『めばえ』第21巻第5号（通巻240号）で終刊。二十年余にわたり刊行された。

1月15日、山口県医学界の総合新聞『防長醫界』（柳星甫主幹）を創刊。

10月11日、山頭火13回忌記念行事を「芳風吟社」主催で行う。午後2時より防府市宮市護国寺にて墓前法要。午後7時より山頭火忌俳句会並びに追悼座談会を、車塚の自宅にて行う。

10月12日、山頭火遺墨展を防府市の駅通り前田百貨店にて開催。

4月、俊乗坊重源顕彰会を創設し、重源上人七百五十年祭を開催、『重源上人七百五十年祭献詠集』を編集・発行。

10月10日、防府市八王子戎が森に山頭火句碑を建て、除幕式を行う。

「雨ふる故里ははだしであるく 山頭火」

5月12日、桑原政夫（東寧）らと計り、森静男（鷗外の父）の生誕地、防府市植松小松原の旧宅跡に生誕記念碑を建て、除幕式を行う。

8月15日、新聞『防長醫界』第127号で終刊。

11月3日、桑原政夫（東寧）らと計り、光田健輔先生胸像建立委員会を中心となつて、防府市役所の前庭にこれを建て、除幕式を行う。

12月20日、『星甫随筆』（柳きよ女・星甫随筆刊行会）を刊行。

1月14日、逝去。享年73歳。

4月2日、又田竹栖らが発起人となつて、防府天満宮参集殿裏手の梅林の中に句碑が建てられ、除幕式が行われる。

「己が服む おのが処方や 暑氣中 星甫」